

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-11C	22-006	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名 (原題/訳)		
Association Between Changes in Alcohol Consumption and Cancer Risk 飲酒量の変化とがん発症リスクとの関連		
執筆者		
Yoo JE, Han K, Shin DW, Kim D, Kim BS, Chun S, Jeon KH, Jung W, Park J, Park JH, Choi KS, Kim JS.		
掲載誌		
JAMA Netw Open. 2022 Aug 1; 5 (8): e2228544. doi: 10.1001/jamanetworkopen. 2022.28544.		
キーワード		PMID
飲酒、がん発症、アルコール関連がん		36001313
要 旨		
<p>目的：飲酒量とがんの関連は多くの研究結果から示されているが、飲酒行動の変化ががん発症リスクを増減させるかについては分かっていない。本研究では、飲酒量の増加、減少、あるいは禁酒とがん発症リスクとの関連を検討した。</p> <p>方法：2009年および2011年の国民健康診査を受けた、飲酒状況のデータを有する40歳以上の男女を対象とした。飲酒レベルにより、飲酒なし(0 g/日)、軽度(<15 g/日)、中程度(15-29.9 g/日)、多量(>30 g/日)飲酒に分け、2009年から2011年の飲酒レベルの変化により、非飲酒群、維持群、増加群、禁煙群、減少群の5群に対象者を分類した。Cox回帰モデルを用い、飲酒レベルの変化による新規のがん発症ハザード比(HR)および95%信頼区間(CI)を算出した。なお、飲酒維持群を参照とした。主要アウトカムはアルコール関連のがん(頭頸部、食道、結腸直腸、肝臓、喉頭、および女性の乳房のがん)、副次アウトカムはすべてのがん(甲状腺がんを除く)とした。</p> <p>結果：対象者451374人(平均年齢53.6歳、男性51.5%)のうち、追跡期間中(中央値:6.4年)のがん発症率は7.7/1000人年であった。維持群と比べ、増加群ではアルコール関連がんおよび全がんの発症リスクが高かった。非飲酒群に比べ、非飲酒から軽度、中程度、多量飲酒に変化した群において、それぞれアルコール関連がん発症リスクが高かった。軽度飲酒から禁酒した群は、飲酒レベル維持群よりもアルコール関連がん発症リスクが低かった。</p> <p>結論：飲酒量の増加は、アルコール関連がんおよび全がんの発症リスクと正に関連し、継続的な禁酒と飲酒の減少は、アルコール関連がんおよび全がん発症リスクの低下と関連した。がんの予防のためには、アルコール摂取の中止と減量を強化する必要があると考えられた。</p>		